

『讃岐典侍日記』の表現

Expression in the *Sanukinosukenikki*

林 水 福*

The actual experiences of Fujiwara Chosi, author of the *Sanukinosukenikki* are an enigma enshrouded in mist. That shadows of the author and her spirit are consistently projected in the work, determining its expression, is, however, beyond doubt. By examining aspects of expression of the work, the author's mentality and creative intentions can be brought to light, and this in turn should lead to a grasp of the work's theme. Needless to say, all of this examination must take place within the framework of a study of the text as a literary work.

A wide rift between the expression of the first and second fascicles of the *Nikki* has long been noted. In particular, much of the first fascicle, accounts of events focused on the Horikawa Emperor, is related from the third person perspective of a witness. Such accounts tend to be marked by conclusive phrases ('Now I understand...' 'What a sad affair' 'It was as though...' 'And thus today ended') which Kusabe Ryoen has called "concise and strong, forceful, tightly drawn." Behind such diction, certainly, is a strong and reverent affection for the Horikawa Emperor.

* LIN Shui-Fu 輔仁大学副教授

The expression of the second fascicle is extremely diversified. In accounts of public events, there is a display of exalted feeling not seen in the first fascicle. Again, a demand, addressed to the reader as witness, for recognition of the author's love relation with the emperor can be seen as underlying the expression of fragmentary recollections. Further, some of the more coherent recollective expressions tend to be highly subjective and hermetic. This would appear to evidence a shift in the author's perspective from the emperor to herself.

In addition to the above, a common tendency of the writing of both fascicles towards frequent use of repetitive diction and stock phrases does, indeed, as Matsumoto Yasusi has argued, result in a lack of precision. But this can be understood as the emphatic expression of high emotion, a response to the demands of the author's spirit.

The present study proceeds from an examination, outlined above, of aspects of expression, in an attempt to discover the author's mentality and intentions, and if possible to touch upon the thematics of the *Nikki*.

(1)

『讃岐典侍日記』の上巻は、堀河天皇が発病した嘉承二年(1107)六月二十日から崩御に至るまでの約一カ月間の看取り記であり、下巻は鳥羽天皇への出仕と故堀河天皇追慕が主に記されていますが、作者藤原長子の実体験、即ち作者がどの程度堀河天皇に寵愛されていたかを客観的に探るのは極めて困難です。

本日記の特色としては、天皇の死を扱っていること^(注1)がまず第一にあげられますが、作者は堀河天皇を直接看護した女性の一人として天皇のそばに仕えたということを示したいという意図が、下巻の表現から感じられるにもかかわらず、上巻の表現はなぜか傍観者的視点によっていると思われま

さらに不思議なことに、上巻の傍観者的視点による表現から見えてくるものは、天皇の苦しげな闘病の様子と、作者の献身的な看護ぶりであり、初めに述べたような、天皇の作者に対する寵愛の様相は意外に見えて来ないのです。

作者は一体、どのような目的でこの日記を執筆し、それによって何を訴えようとしたのでしょうか。ここでは、『讃岐典侍日記』の表現を通して、それを探ってみたいと思います。

(2)

先に述べましたように、堀河天皇の発病から崩御までのことが記された『讃岐典侍日記』の上巻には、天皇の看病をしている作者の姿が、日記文芸としてはやや例外的な傍観者的視点によって描かれています。^(注2) 資料の(1)(2)(3)を御覧下さい（本稿末尾参照）。

草部了円氏が、簡潔にして力強く、気丈な引き締まった表現^(注3)と指摘した「こはいかにしつることぞかなし」「何にかは似たる」などの叙述は、緊迫した状況における日記文芸の感情表現としてはそっけないとも受けとれます。松本寧至は、「おしはかるべし」という強い訴えかけは典侍の場合は、表現せず読者に想像してもらおう方が無難であるといった控え目な態度の現れである^(注4)とされていますが、これはある意味では当を得た指摘と言えます。

上巻には、作者の献身的な看護振りが随所に見られますが、発表資料(1)(2)(3)の場面のように、作者はその舞台の中心的人物としては行動していません。同じジャンルの平安女流日記文芸の『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』などと比較してみても、日記文芸の作者としては、日記中に占める位置がかなり低いと言わざるを得ません。これは、一つには、作者藤原長子が自らの身分・地位を、日記中においても頑なに守ったために、傍観者的視点に基づいた表現が上巻を覆ってしまったと考えられます。

資料(4)を御覧下さい。

これは堀河天皇が危篤の場面ですが、作者は大弐の三位と大臣殿の三位の命令に柔順に従って行動しています。ここはまさに彼女自身の身分・地位の低さを語っているのではないのでしょうか。上巻に登場する作者は、命令を受ける側のイメージが非常に強いうえで、客観的に言って堀河天皇から特別な寵愛を受ける場面は見られません。上巻第八段に、天皇が関白の目から作者を隠そうとして膝を立てられたいわゆる「お膝のかげ」の場面は、下巻で二度も回想され、作者にとって最も印象に残っている出来事だったのですが、それも恋愛というには程遠いものであったと言わざるを得ません。作者はなぜ、自分が中心人物であるべき日記文芸において、これほどまでに中心から退かなければならなかったのでしょうか。日記に描かれている場面での作者の社会的身分・地位は、他の平安女流日記と大差はなく、それは問題にならないはずです。むしろ重要なのは、作者が上巻において、あえて傍観者的な中心から退いた位置に自らを表現した文芸上の理由であると私は考えます。

(3)

さて、上巻のみからでは結論は出ませんので、続いて下巻の表現を検討してみたいと思います。便宜上、下巻を、堀河天皇亡きあとの作者の「現在」を描写する部分と「過去」を回想する部分とに分けて論を進めて行きたいと思います。下巻には堀河天皇亡き後、作者に鳥羽天皇への再出仕の話が持ち上がり、故堀河天皇を思慕しつつも、再出仕する様子と心情が描かれています。

上巻は先に述べましたように傍観者的視点で堀河天皇を中心とするその周りの出来事を描いて、その一こまの末尾に自己の感想を一言付け加える形のものが多いのですが、下巻の堀河天皇亡きあとの作者の「現在」を描写する文章の大部分は、作者がその場面の中心的な存在として表現されています。資料(5)を御覧下さい。

作者の視点は、眼前の出来事に配られながらも始終堀河天皇と過ごした過

去を經由して自己の身の上に戻ってくるのです。「昔思ひいでられて」「べちにたがひたることなきこちして」「昔にたがはず」などの表現は、それを端的に示しています。つまり、作者は「現在」の時間の中にいるにもかかわらず、作者の判断の基準となっているのは堀河天皇が生きていた「過去」なのです。

下巻に登場する作者は、周りの人たちと違う行動をとるのも、特徴の一つです。例えば嘉承二年（1107）十一月十九日、故堀河天皇の月忌みに、宮中の人々は鳥羽新帝の即位の準備で、極めて忙しく、しかもその日は大雪が降っていたのにもかかわらず、作者は周りの人たちの反対を押して、故堀河天皇の月忌みに出かけます。その日の叙述は、作者の堀河天皇への追慕の真情をたたえ、読む者の胸にせまりますが、一方、作者の孤独・寂しさをもまた如実に表現しています。また、四月の衣替の際にも、作者は堀河天皇のことを想い、にぎやかな状況から一人隔たっています。他にも堀河天皇亡きあと、作者が周りの人々になかなか融け込めずに、その場にふさわしくない振舞いをする場面は枚挙に遑がありません。

無論、下巻において、作者が「現在」の時間の中で「現在」の状況に共感を示す場面も全然なくはないのですが、それは非常に少なく、しかも作者の堀河天皇への追慕の真情が人々に汲取られている時に限り、作者長子は、「現在」の時間の流れの中で生きることができたと言えるでしょう。すなわち、堀河天皇のいない下巻において、作者は確かに日記の中では中心人物となっているのですが、下巻の日記の中の作者は堀河天皇と生きた「過去」を抱くことによってのみ、「現在」の自分を確かめていたと言えそうです。

(4)

そこで、次に、下巻の回想の部分を検討してみたいと思います。

一言で回想と言っても、『讃岐典侍日記』の場合、断片的なものにとまとまったものとの二つに大別されると思われます。断片的な回想の表現については、

資料(6)を御覧下さい。

(ア)(イ)(ウ)(カ)は公の行事、あるいは鳥羽天皇の挙動につけて堀河天皇と過ごした昔の事を思い出すというのですが、その昔の具体的な内容は、日記からは知ることができません。そして、(イ)と(ウ)は、第三者の語を通して、作者自身と堀河天皇との昔の事が語られているものなのです。これらの断片的な回想には、作者が自分と堀河天皇とがいかに切っても切れない関係であったかを、第三者のみならず、作者自身にも認めさせたいという意図が強く働いていると思われる。「かきくらすこちす」「心うき」という嘆きは、堀河天皇と自分が共に生きていた共有の過去があったことを強調している点は注目すべきだと思います。

さて、まとまった回想の部分としては、資料(7)にあげた堀河天皇と過ごした雪の朝の回想が、代表的と言えるでしょう。そこには心情語はほとんど見られず、そこに登場する作者は、まるで「恋物語」の主人公でもあるかのように、全身が幸福感に包まれているのです。従来、このいわゆる「五節の雪の朝」の部分、作者と堀河天皇との間に、典侍と天皇という職掌を超えて、男女関係が^(注5)あることの証拠として、よく引用されてきました。資料(8)に引用した、いわゆる「扇引きの回想」も同様です。但馬殿の言葉「家の子の心なるや。こと人はえせじ」、すなわち、親しくお仕えしていればこそできる作者の天皇に対するやや無礼とも言える親しげな行動の指摘が、作者を幸福な気持ちにさせています。

上巻においては、作者は中心から退いていたのに対して、下巻のまとまった回想の部分においては、一見、作者は日記の中心にいるように思われます。しかるに、そこでも中心は、あくまでも光り輝く堀河天皇であり、作者はその光を反射するのみで自らは光を発しない月のような存在でしかないのです。作者が最も輝いた「五節の雪の朝」「扇引き」「お膝のかげ」等の回想の部分の表現を詳細に検討すると、感情語はほとんど見られず、末尾の部分を除けば作者の胸に刻まれた回想としては意外に淡々とした表現になっていること

に気づきます。さらに、その表現の中には、作者の言動を大きく優しく見守り、受け入れる堀河天皇の姿があるのです。堀河天皇が作者に愛を求めたりする場面は一つもなく、作者の天皇への思慕を天皇が静かに包み込むという形になっているのです。作者は下巻の、まとまった回想を描くにあたり、まず、静かで大らかに全体を包み込む天皇の姿を中心に据えたのでした。作者が天皇からの愛を描く目的があったならば、その表現形態は、現在のものと大きく異ならなければならなかったと私は考えます。

(5)

さて、以上のことをまとめると、どのような結論が導き出されるでしょうか。上巻における日記の中心はあくまでも堀河天皇であり、作者はあえて自分の姿を、堀河天皇にお仕えする一侍女として、一步退いた立場から表現しています。無論、作者の献身的な看護ぶりは非常に印象的ですが、作者が強調しているのは、天皇の存在の大きさであり、天皇が作者を必要としていたということよりもむしろ、作者がいかに天皇を必要としていたかが、上巻の表現から浮かび上がってくるのです。資料(9)に引用したのは、堀河天皇崩御の際、乳母たちの号泣の中、声をあげて泣かなかった作者が、自分の天皇を想う気持ちが他人よりも劣っていたのではないかと考える場面ですが、作者は日記を記すという文芸的な行為によって、自分を強引に天皇へと結びつけようとしているかのようです。普通ならば、看護されていた天皇が看護していた作者を必要としていたと表現するところですが、ここでは、看護していた作者にとって天皇がどれほど必要な存在であったかしか表現されていないと言ってよいほどです。天皇は、作者の表面にはあらわれない内面的な強烈な思慕に、時に応じて少しこたえるという形をとっているだけで、求愛や寵愛などという、天皇の側からの積極的な働きかけは、『讃岐典侍日記』には表現されてはいないのです。

下巻をも考え併せると、そのことはいっそう明確になります。作者は、堀

河天皇亡きあとの「現在」の時間の中では生きていけない存在となってしまう
ています。

下巻において作者は、時間の流れの中で浮き上がっているために、一見、
日記の中心にいるように見えますが、下巻の時間は、堀河天皇が生きていた
「過去」の時間の強力な引力のために極端に歪んでしまっているのです。下巻
の中心は、「現在」の時間から「過去」の時間へ引きずられて中途半端な位置
にいる作者ではなく、大きな力で作者の時間までも引き寄せる亡き堀河天皇
であったと言えるでしょう。そして、それは堀河天皇が求めたものではもち
ろん無く、作者自身が、この日記において、輝く堀河天皇像を創造し、作者
はその堀河天皇像の中にのめり込んで行ったのだと思われます。

作者は書くという行為をとおして、穏やかで優美な堀河天皇像を創造しま
した。そのため、自分が主人公であるはずの日記において、まず堀河天皇を
中心に据え、自らはわきへ少し退いてしまうという表現がなされたのではな
いかと、私は考えたのです。

資 料

- (1) 経読まるるを聞かせたまひて、「今はやくあらじ。ただかりうつせよ」と
おほせられいでたれば、ものつく者などめして、みて参り、うつさるるお
びたたしきは、おしはかるべし。うつりて、そのこととはいはで、かはめ
きののしるさま、いとおそろし。(第四段、堀河天皇が人事不省になりかけたた
め、読経が行われている場面。374ページ。圏点は引用者)
- (2) いかく何しになれつかうまつりけんと、くやしくおほゆ。参りし夜よ
りけふまでのこと思ひつづるここち、ただおしはかるべし。こはいかにし
つることぞと、かなし。(第五段、苦しい天皇の様子を見て、泣く作者、377
ページ。圏点は引用者)
- (3) 夕つかた、帰らせたまひぬれば、たれもたれも参りあひぬ。御けしき、
うちつけにや、かはりてぞ見えさせたまふ。「けふしも、すこし夜の明けた

るこちしておぼゆれ」とおほせらるる聞くこちのうれしき、何にかは
にたる。(第九段、中宮の帰った後、383ページ。圏点は引用者)

- (4) 見れば、大弐の三位、うしろのかたいだきまゐらせて、大臣殿の三位、
ありつるままにそひふしまゐらせたり。御あとのかたにつゐるたれば、大
弐の三位、「苦しうせさせたまへば、申しつるぞ。その御足、とらへまゐら
せたまへ」とあれば、とらへまゐらせたり。御あせのごひなどせさせた
まふ。大臣殿の三位、「かく静ませたまへるほどに、せまほしきことのある、
して参らん」とて、「参らせたまへ」とあれば、そひふしまゐらせぬ。
(第一七段、393ページ)

- (5) ついたちの日の夕さりぞ参りつきて、陣いるより、昔思ひいでられて、
かきぞくらさる。つぼねに行きつきて見れば、こと所にわたらせたまひ
たるこちして、その夜は、何となくて明けぬ。

つとめて、起きて見れば、雪、いみじく降りたり。今もうち散る。おまへ
を見れば、べちにたがひたることなきこちして、おはしますらん有様、
ことごとに思ひなされてゐたるほどに、「降れ、降れ、こ雪」と、いはけなき
御けはひにておほせらるる、聞こゆる。こはたそ、たが子にか、と思ふ
ほどに、まことにさぞかし。思ふに、あさまじう、これを主とうちたのみ
まゐらせてさぶらはんずるか、たのもしげなきぞ、あはれなる。

昼ははしたなきこちして、暮れてぞのぼる。「こよひよきに、もの参ら
せそめよ」といひにきたれば。おまへの大殿油くらかにしなして、「こち」
とあれば、すべりいでて参らす、昔にたがはず。御台のいと黒らかなる、
御器なくてかはらけにてあるぞ、見ならはぬこちする。走りおはしまし
て、顔のもとにさし寄りて、「たれぞ、こは」とおほせらるれば、人々、「堀
河院の御乳母子ぞかし」と申せば、まこととおぼしたり。ことのほかに、
見まゐらせしほどよりは、おとなしくなせたまひにける、と見ゆ。

をととしのことぞかし、参らせたまひて、弘徽殿におはしまいに、こ
の御かたにわたらせたまひしかば、しばしばかりありて、「今は、さは、帰

らせたまひね。日の暮れぬさきに、かしらげづらん」とそそのかしまるらせたまひしかば、「いましばし、さぶらはばや」とおほせられたりしを、いみじうをかしげに思ひまゐらせたまへりしなど、ただ今のこちして、かきくらすこちす。

その夜も御かたはらにさぶらひたれば、いといはけなげに御ぞがちにてふさせたまへる、見るぞ、あはれなる。(第二九段、元日に鳥羽天皇に出仕する場面、418～9ページ)

- (6) (ア) ほのぼのと明けはなるるほどに、かはら屋どものむね、かすみわたりてあるを見るに、昔うちへ参りしに過ぎざまに見えしほどなど、思ひいでられて (415ページ)
- (イ) おととしのことぞかし、参らせたまひて、弘徽殿におはしまいしに(中略)「いましばし、さぶらはばや」とおほせられたりしを、いみじうをかしげに思ひまゐらせたまへりしなど、ただ今のこちして、かきくらすこちす。(419ページ)
- (ウ) (摂政忠実が)「思ひかけざりしことかな。(中略)世はかくもありけるかな」といひかけてたたせたまひぬる、聞くぞ、げにと心うき。(421ページ)
- (エ) 四月の衣がへにも、女官ども、例のことなれば、われもわれもと(中略)これををかしとおほしめしたりしが、思ひいでられて。(425～6ページ)
- (オ) (鳥羽天皇の引直衣の)御しりつくりまゐらするにも、昔、まづ思ひいでらる。(432ページ)
- (カ) 御経したためて、持て参りて、笑はれん、とぞおほしめして、あまりなるまでかしづかせたまひし御ことは、思ひいでらるるに、(439ページ)
- (7) 雪の降りたるつとめて、まだおほとのごもりたりしに、雪高く降りたるよし申すを聞こしめして、その夜、御かたはらにさぶらひしかば、もろと

もに具しまゐらせて、見しつとめてぞかし、いつも雪をめでたしと思ふなかに、ことにめでたかりしかば、あやしのしづがやだに、それにつけて見所こそはあるに、まいて、玉・鏡とみがかれたるももしきのうちにて、もろともに御覽ぜし有様など、絵かく身ならましかば、つゆたがへずかきて、人にも見せまほしかりしかど、おしあげさせたまへりしかば、まことに、降りつもりたりしさま、こずゑあらん所は、いづれを梅とわきがたげなりし。^{じじゅうでん}仁寿殿のまへなる竹の台、をれぬと見ゆるまでたわみたり。おまへの火たき屋も、うづもれたるさまして、今もかきくらし降るさま、こちたげなり。^{たきぐち}滝口の本所^{ほんど}のまへの^{すいがい}透垣などに降りきたる、見所あるこちして、をりからなればにや、ごぜんのたちしは、せめてのわが心の見なしにや、かかやかしきまでに見るに、わがねくたれの姿、まばゆくおぼしかば、「常よりみめほしきつとめてかな」と申したりし、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」とおほせられて、ほほゑませたまひたりし御口つき、向かひまらせたるこちするに、^{ごせち}五節のをり着たりし、黄なるより紅までにほひたりし^{もみど}紅葉どもに、^{まげぞめ}葡萄染^{からざぬ}の唐衣とかや着たりし、わが着たるものの色あひ、雪のほひにけざけざとこそめでたきに、とみにもえ参らせたまはで、御覽ぜしに、滝口に本所^{ざふし}の雑仕なめり、女の声にて、^{すいがい}透垣のもと近くさしいでて、見るけはひして、「あな、ゆゆしの雪の高さや。いかがせんずる。すそもえ取りゆくまじきはとよ」といひしを聞かせたまひて、「これ聞け。いみじき大事いできにたりとこそ、思ひあつかひたれ。雪のめでたき、御目、さめぬるこちする」とて、笑はせたまひしなど、思ひいでられて、(第四五段、442~4ページ)

- (8) 待ちつけて、いづみの有様うちうちに問ひなどして、「扇ひき、こよひは、さは」とおほせられしかば、「明けんが心もとなさに、こよひと思ふに、人たちのけしきのくらくて見えざらんこそ、くちをしくさぶらへ」と申ししかば、つとめて、明るるやおそきとはじめさせたまひて、人たちめしすゑて、^{だいに}大弐^{さんみどの}の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、「まづ、ひけ」とお

ほせられしかば、ひきしに、うつくしと見えしをえひきあてで、なかにわろかりしをひきあてたりしを、うへに投げおきしかば、「かかるようやある」とて、笑はせたまひたりしことを、^{たじまどの}但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など、興じあはれしに、そのをりは何ともおほえざりしことさへ、いかでさはしまるられるにかと、なめげに、けふは、ありがたくおほゆる。(第三六段、428～9ページ)

- (9) われは、御あせをのごひまゐらせつる^{みちのくにがみ}陸奥紙を顔におしあててぞ、そひゐられたる。あの人たちの思ひまゐらせらるらんにもおとらず、思ひまゐらすと、年ごろは思ひつれど、なほおとりけるにや、あれらのやうに声たてはれぬは、とぞ思ひしらるる。(第一九段、400ページ)

本文の引用及び章段数・ページ数の表示は、石井文夫氏他校説・訳『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（日本古典文学全集18、小学館、昭54・4）に拠る。

注

- (1) 池田亀鑑氏『宮廷女流日記文学』（至文堂、昭54・12）参照。
- (2) 本文の引用及び章段数・ページ数の表示は、石井文夫氏他校注・訳『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（日本古典文学全集18、小学館、昭54・4）に拠る。
- (3) 草部了円氏『讃岐典侍日記研究と解釈』（笠間叢書88、笠間書院、昭52・10）参照。
- (4) 松本寧至氏「讃岐典侍の性格」（『群馬女子短期大学紀要』創刊号、昭47・11）参照。
- (5) 今井源衛氏「讃岐典侍日記」（『解釋と鑑賞』昭36・2）参照。

討議要旨

梅山秀幸氏より、中国の宦官と日本の女官のあり方が、類似しているかどうか、との質問があった。発表者からは、現在の自分には分らない旨、お答えがあったが、会場の孫久富氏より「中国の書簡文学が、平安期の日記文学

と通じる所がある。宦官の手によって書かれたものは少ないが、『宮廷内録』といった小説類が参考になろう。」との御指摘があった。

高橋清隆氏より、堀川天皇と作者長子との間の男女関係の有無、その作品への形象化について質問があった。発表者は、今までの研究に両論あることを述べられ、自分は「お膝のかげ」の部分などから、二人の恋愛関係は薄いととらえたい、と再説された。

今関敏子氏より、四点の反論があった。①「いずみもわびよ、いけもわびよ」は、明らかに天皇が添い伏しをせよと言っており、男女関係はあったはずである。②「おしはかるべし」というのは、表現できないほどの激しさを秘めた態度なのではないか。③作者が堀川天皇といかに親しかったかということを書きたいのだから、他の人とは違う行動を書くのは当然ではないだろうか。④光が天皇であって自分を月のようにしか書いていないのは、そういうふうにして、自分がいかに天皇を愛していたかということを書きたかったのではないか。

発表者は、四つの反論の根本には、男女関係の有無に対する意見の相違がある、具体的に男女関係があったという証拠を教えて欲しいと述べられた。座長の福田秀一氏が、これは、つまるところ読みの問題であり、発表者は今の御指摘を、ひとつの意見として、今後検討されればよからう、とまとめられた。